



日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.67

日本レイ・アームストロング協会 (ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF) 2011年4月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.icom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

**「ジャズは難しくないすぎた！ そして人々の支持を失った」(サー・チャールズ・トンプソン)
ジャズにスイングを…そして、ジャズの楽しさを取り戻しましょう！**

ジャズをリフォーム！ 楽しいジャズの復権を！！

「東日本大震災」の皆様には心からお見舞い申し上げます＝ニューオリンズからも救援の手

「東日本大震災」という大変な時期の会報「67号」の発行となりましたが、被災された皆様には心からお見舞い申しあげ、会員の皆様方のご無事をお祈り申し上げます。一瞬、ニューオリンズを襲ったハリケーンの悪夢が甦り…言葉がありません。そのニューオリンズからさっそく支援の申し入れも届いております。1994年の発足以来17年、皆様の応援を頂き、本当にいろいろな活動を実現してこられたことを、お礼申し上げます。ジャズの歴史をテーマにしたWJF例会も、あっという間に49回、今回は50回目の開催です。49回目の特別例会に出演して下さったサー・チャールズ・トンプソンさん、92歳！で日本への“里帰り”、ほぼ10年ぶりの感動の“再会”、そして幻の名盤『ビック・ディッケンソン・ショーケース』の再現コンサートとなりました。今回は、彼の“帰国”と時期を同じくして持ち上がってきた＜ジャズのリフォーム＞に焦点を当て、ジャズに造詣の深い方々からもご意見を伺いました。(外山喜雄・恵子)

ジャズの黄金時代を生きてきた長老サー・チャールズ・トンプソンさん(写真右=49回例会にて)の言葉です。

＜『ビック・ディッケンソン・ショーケース』の CD に入っているビックやエドモンド・ホール、ジョー・ジョーンズ、そしてベイシー楽団のバック・クレイトンやハリー・エディソン…。彼等は本当に天才、ジーニアスさ！ 彼等の音楽は小難しくも何ともない。ベイシーにしたって、エリントンにしたって、メロディーがあって、スイングしていて、一般大衆が理解して楽しめるジャズなんだ。最近の音楽は、ミュージシャンが、自分がどれだけ上手かを証明してみせようとするだけのような気がしてね…＞

この度、ジャズ評論家、油井正一さんの貴重なコレクション



ョンが、『油井正一アーカイヴ』として慶応義塾大学アートセンターに開室。慶応OBで油井先生と親しい間柄だった中村宏先生(ジャズ評論家、医学博士＝防衛医大名誉教授)がご寄稿下さり、こう結んでいらっやいます。

＜医学はこの40年余りで、長足の進歩を遂げたが、ジャズはこの間にどのくらい進歩しただろうか。確かに楽器の奏法は、技術的に進歩したかもしれないし、ジャズの形式にも変化がみられるかもしれない。しかし本質的にジャズが進歩したといえるかどうか…＞

(10～13面にご寄稿、この項は次ページに続く)



49回例会を終えてサー・チャールズご夫妻を囲む出演者のみなさん

WJF第49回例会「ジャズ映画とライブ・コンサート」

お帰りなさい！ サー・チャールズ・トンプソン！

蘇るバンガード盤、ビック・デッケンソン・ショーケース・セッション

SIR CHARLES THOMPSON

久々のWJF“本格アカデミック例会”、お帰りなさい！
サー・チャールズ・トンプソン！「ジャズ映画とライブ・コンサート」<蘇るバンガード盤、ビック・デッケンソン・ショーケース・セッション>が2月15日、東京・お茶の水のアテネ・フランセ文化センター4Fホールで開催された。例会としては数えて49回目。心配された前日来の大雪も未明には晴れて、朝方から温かい日差しも出迎えてくれた。おかげで、ほぼ満席、150人近い来場者で賑わい、みなさんと一緒に往年の心ときめくジャズを楽しませていただいた。

(小泉良夫)

前日の大雪もカラリと晴れ渡って… お日様もSirご夫妻を温かく歓迎！

何しろ前日夜は大変な大雪で、都心も久々の積雪。首都圏の鉄道も一部でストップしていたほど。外山夫妻は頭を抱えていた。「92歳のサー・チャールズ・トンプソンさん(以下:サー・チャールズ)が雪で滑ってケガでもしては…」と。でも、聖者(セイント)の祈りは神にも通じて!? 当日は、雲一つない素晴らしいお天気になった。そう、外山夫妻は「何かを持っている！」(ワセダの祐ちゃんの流行語ではないけど)。

(前ページから続く)

大衆性も失われてしまったジャズ 教授風に変化して難解なものに

いつの間にジャズは、こんなに難くなったのでしょうか。“音楽学校”や“コンサーバトリー”とは正反対の黒人スラム街や場末の酒場、果ては紅灯街の猥雑な環境から生まれ、それ故の力強さ、親しみやすさ、強烈なスイング感と大衆性を持っていたはずのジャズ。サッチモ、エリントン、ベイシー…。アメリカと世界の音楽を変えたジャズの巨人達は、音楽学校とは無縁の環境から生まれました。クラシック音楽と違ったジャズの最大の魅力が、そんな“大衆性”にあったジャズ界は、いつの間にかジュリアード音楽院やバークレー卒の同窓会。“ジャズはマイルスとチャーリー・パーカーに始まった”。“ジャズが生まれたのは、ニューオリンズではなくバークレーやジュリアード”。…とでも言われそうなジャズ誌、ジャズ界、ジャズファンの昨今(というかここ数十年)の状況。ジャズ・ミュージシャンも“エンターテイナー”から、“教授”風に変化、それと共にジャズは難解になり難い音楽になりました。

かつてジャズが独占していたその地位はすっかり、ロックという音楽学校とは無縁、大衆のパワーを持ち大衆に受け入れられる音楽に取って代わられてしまいました。そんな中、ジャズはちょっぴり“高級な音楽”としての地位を獲得したのか、ロック界のスター・ミュージシャンが一種の“ステイタスシンボル”のようにジャズを取り上げたりしています。こうした状況はある意味喜ぶべきことかも知れませんが。私たちの時代も、ジャズは“ロックン・ロールは照れく

ちなみにサー・チャールズは、1918年(大正7年) 3月21日生まれ、現在、東久留米市在住です。現・93歳！

午後6時半開演。司会は(この方なくてはWJFのイベント



は進行しません。会報「ワンダフルワールド通信」編集長) 山口義憲さん。サー・チャールズもマキコ夫人ともども元気な姿を見せ、

ゲストのジャズ評論家、瀬川昌久さんらと揃って席に着き、万雷の拍手を浴びる(写真上)。何と言ってもこの日の例会のテーマは、かつて大橋巨泉さんが「中間派ジャズ」と命名したメインストリームの中心人物、サー・チャールズ(p)を迎えて、ジャズ史に残る名盤ともなったバンガード盤「ビック・デッケンソン・ショーケース」のセッションを再現しようという試み。

さくて…”という人種が聴く、ちょっとハイレベルな音楽と言う感じもありましたネ。

でも、ジャズが難解になり、ハイレベルな“ブランド”になるにつれ、私たちが愛したジャズのスイング感と楽しさは、消え去っていったと思います。ファンは去っていき、パイが小さくなったジャズ業界を象徴するように、老舗ジャズ誌も廃刊となりました。

黄金時代のジャズ本来の魅力を！ …スイングしなけりゃ意味がない

サー・チャールズ・トンプソンはこう言っています。

<チャーリー・パーカーは大天才だったが、ジャズを難しくしすぎた。…そして人々の支持を失った…>

シンプルで強烈にスイングするジャズ…その魅力で世界中の何十億の人々を虜にしたジャズ…そんな時代を知っている私たちは、是非黄金時代のジャズ本来の魅力と、あの時代の“芸”のノウハウを若い世代に伝えていかなければ…とつくづく思います！

デューク・エリントンは、すでに1931年…80年も前にこう言っているのです。“It don't mean a thing, if it ain't got that swing” (…スイングしなけりゃ意味がない)と！ジャズはいま、楽しさとスイングという“ジャズ・リフォーム”を必要としています。そして、嬉しいことに、若い世代のミュージシャンや音楽界のあちこちから、そうした“リフォーム運動”の芽が吹き、新鮮なリズムがスイングし始めているようにも感じます！(外山喜雄・恵子)

次々と貴重な巨人たちのジャズ映像 瀬川さんの解説で「ジャズ・セミナー」

まずは、外山さんの貴重な映像、ジャズフィルム・コレクションからサー・チャールスの世界を追う。NYデビュー当時のバンドリーダーで、彼に“サー”というニックネームをつけたレスター・ヤング(ts)が出演している「Jammin' the



Blues」。制作がああのノーマン・グランツ、監督は名ファッション写真家のギヨン・ミーリーとか。レスターときたら、椅子に座って45度くらい斜めにサックスを抱えて吹いている。おまけに左手の指先には火がついて煙をあげているタバコ。いまにも指を焦がしそうな格好での演奏。紫煙がもうもう…そんな時代だったんですねえ。登場したヴォーカリストの黒人女性歌手が男性ダンサーと強烈なジルバを披露する。

瀬川さんの解説によると、この「ジルバ」って言う日本語？は、「ジターバグ (Jitterbug)」が日本的になまって出来た言葉なんですって。うーん、納得(まさにジャズ・セミナーなのです)。この映像は1944年、ン？ 外山さんが生まれた年じゃないですか！ 映像は「サニーサイド」、イリノイ・ジャケー(ts)、パニー・ケッセル(g)らも熱演する「Midnight Symphony」へと続く。

50年も前にもう「伝説のピアニスト」 では、そこにいる方はいったい！？

イギリスのテレビ番組「Jazz 625」(1964年)では、司会のジャズ評論家、スタンレー・ダンスが何とサー・チャールスをすでに「伝説のピアニスト！」って紹介していました。外山さんが「50年も前に“伝説のピアニスト”って言われていたんですから、いまはいったい…」(神様ですかねえ、なあんて思っていたら)最前列からマキコ夫人「化石、化石！！」(会場爆笑)。何ともユーモラスな奥様なのです。でも、とっても気を遣っていたらしく、92歳でしょう～、

曲を覚えているか、はらはらして胃が痛くなりましたよ」と外山夫妻に打ち明けていたそうです。

さあ、演奏に入ります(写真①)。まずメンバーをご紹介しますおきましょう。この日の出演は、「外山喜雄とデキシーセイ
ンツ& Sir Charles Thompson」。外山喜雄(tp,vo)、外山恵子(この日は、スティーヴ・ジョーダン張りにギターに専従=

写真②)、鈴木孝二(as,cl)、広津誠(ts,cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds=第2部)、山本勇(ds=第1部)。

曲は Showcase から「ロシアの子守歌」「マギー、二人が若かった時」「Nice Work

If You Can Get It (首尾よく行けば)」「You Brought A New Kind Of Love To Me (新しい恋を)」「Runnin' Wild」…1950年

代のレコードと全く

変わらないサー・チャールスのソロもとびだし、映像を堪能、懐かしい曲を耳にして、司会の山口さんもおっしゃるように「いろいろと思い出が蘇ってきました」というみなさんも少なくなかったのでは…。



セインツの「ショーケース」も圧巻！ 次いで「バック・クレイトンに捧げて」

15分の休憩を挟んで第2部はやはり映像でスタート。「Crimson Canary (赤いカナリヤ)」(1945年、アメリカ映画)。米の著名な雑誌「エスクエイア」が選んだポール・ウイナーによる演奏が紹介される。コールマン・ホーキンス(ts)、ワード・マギー(tp)、オスカー・ペティフォード(b)、ダンゼル・ベスト(ds)…で、ピアノのサー・チャールスだけがいつこうに映し出されないうちに演奏が終わってしまった…と、ピアノから立ち上がって奥へ歩いて行くピアニストの後ろ姿…そう、まさにサー・チャールスですよ、この歩き方、このピアニストは。

第2部のジャム・セッション(写真③)は「バック・クレイトン・ジャムセッションに捧げて」。「ワン・オクロック・ジャンプ」でふたを開け、サー・チャールス作曲の名曲「ロビンズ・ネスト」、サー・チャールスが渋いヴォーカルも披露してくれた「ブルース」、サー・チャールスの編曲に外山さんがアルト

とテナーのスコアを新たに加えた「レディー・フォー・フレディー」と「ダイナ・フロウ」…そして締めくりは「When You're Smiling (君微笑めば)」。いやあ、本当に感動的な構成、演出・演奏でした。

午後9時ちょうどに終わって、サー・チャールズ夫妻に花束と記念品(透明のグランドピアノ型オルゴール、曲は「星に願いを」だそうです)の贈呈(写真下)、出演者みんな揃って夫妻を囲んでの記念撮影、サー・チャールズにサインを求めるファン、夫妻との記念撮影のグループも絶えません。それにしても、この日のサー・チャールズ、とってもダンディーで素敵でしたねえ。瀬川さんも絶賛の「永遠の若さ」です。傑作だったのは、プログラムの進行中、外山さんが何度もサー・チャールズに感想を求めて「Any comment?」と水を向けると、サー・チャールズはその都度、「ドモ、アリガトウゴザイマス！」で押し通し、大いに笑いを誘っていたこと。でも、ひと言でも感想、聞きたかったですね。もちろん、外山さんに、たっぷりと伺ってもらっています(次ページ)。

大橋巨泉さんの「今週の遺言」も披露 生涯の友、ジャズが死にかかっている

絶賛と言えば、瀬川さんの解説も心の琴線に触れるものがあつた(写真右)。かつてのジャズ評論家、大橋巨泉さんのコラム『今週の遺言』(昨年7月31日発行号の週刊現代)からの引用。巨泉さんは、このサー・チャールズの存在を「中間派ジャズ」として高く評価していた方。このコラムで巨泉さんは『「生涯の友」ジャズが死にかかっている。俺より長生きしてくれ」と大いなる主張を展開する。曰く「ジャズは難しくなりすぎた。そして人々の支持を失った」。その中でサー・チャールズの“証言”として「パーカーは天才だったが、行き過ぎてしまった。ビーバップの形成で、ジャズは大半のファンを失ってしまった」と。巨泉さんはさらに続ける。(このサー・チャールズの“証言”について)「評論家時代は随分保守的な発言だなあとボクは思ったが、いまではトンプソンの真意が解る」。

この例会にいらした方で、この主張に異議を挟む方は

いないと思う。いや、「まったくその通り。よくぞ言ってくれた」という方々ばかりではないかとも思う。そして、外山夫妻の心にきりと小さなひらめきが起こった。「そう、私たちがやらなければ…。ジャズの見直し、再構築。そんな大げさなものではないけれど、我が家をリフォームするように、“現在のジャズ”をちょっぴりリフォームしてみたい。リフォーム・オブ・ジャズですね」と。

この日も素晴らしい皆様方が会場に これからもご支援、ご鞭撻をよろしく

司会の山口さんは学生時代からのジャズ仲間の出席者

と興奮冷めやらず飲みに出掛けたという。奥村清文理事と私(小泉)も、お茶の水の居酒屋で杯を重ねてしまった。そういえば、この日は素晴らしい方々が多数、姿を見せてくれた。

順不同で思いつくままご紹介させていただきます。

この WJF 例会“皆勤賞”

のシンガーソングライターみなみらんぼうさん。随筆家としても多彩な活動をしているいらっしゃる方。NHK のラジオ深夜便でアンカーをつとめる明石勇さん、ジャズをよく掛けてくれるんです。ジャズ評論家の重鎮、悠雅彦さん、

岡崎正通さん、佐藤秀樹さん、原田和典さんもご出席。60年たっても変わらないサー・チャールズのソロに、顔を紅潮させて喜んで下さった。サッチモとジョージ・ルイスの大ファンという、レコード会社ポニーキャニオン会長の佐藤修さん(6~8面に関連記事)。キングレコードでサー・チャールズとセインツとのコラボ CD「THE SIR CHARLES THOMPSON SHOWCASE」(1997年)などを作ったさいの役員でスーパーバイザー、重松英俊さん。テイチク、東芝EMIで活躍され、「ドン・ユール/外山喜雄デュエット、ジム・ロビンソン」を

担当された真田佳明さん。(社)日本音楽家協会会長の石井一さん(参議院議員)…自らサクスを演奏されるし、「Jazz At The Philharmonic(ジャズ・アット・ザ・フィルハーモニック=JATP)」を日本に呼んだのが石井さんのお父上。そして、同協会の「デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー」プロデューサーの佐藤美枝子さん…。



来場者のほぼ半数はもちろん WJF の会員さん。中村宏さん(防衛医大名誉教授、ジャズ評論家=10~13面に關連記事)は慶応の

そしてこの例会を取材してくれたのが、産経新聞でジャズの記事も多数書かれている文化部編集委員の宝田茂樹さん。3月4日付け「集う」のコラムで紹介して下さいました(写真左)。ありがとうございます。

ジャズ研「KKK」の皆さんに声をかけて下さり、多数がご参加。柳澤安信さんは「ホットクラブ・オブ・ジャパン」の方々を多数誘って下さった。ジャズ評論家・故いソノ・テルフ夫人の磯野博子さん、東京ディズニーランドを運営するオリエンタルランド元専務取締役、

奥山康夫ご夫妻、日本屈指の SP コレクター山本俊兵さん…早稲田大学ニューオリンズ・ジャズクラブのOBも多数参加、現役の学生さん達はスタッフとして力になってくれた。サッチモの旅“同窓生”の方々も多数。

集う

レコードで聴いたフレーズがよみがえる

自ら「ビバップ最後の生き残り」と称する現役最長老のジャズピアニスト、サー・チャールズ・トンプソンさん(92)を招いたイベントには、日本レイ・アームストロング協会の関係者や一般のジャズファンら約150人が集まった。

ジャズの記録映画が上映されたあと、舞台ではトンプソンさんとゲストとして迎え入れた「外山善雄とデキシシーエンター」が、ジャムセッション(即興演奏)をスタート。同協会会員でホニキヤニオン取締役に長年の佐藤修さんは「昔、レコードで聴いたそのままのフレーズがよみがえりました」と感慨していました。

トンプソンさんは平成2年、牧子夫人と結婚。日本

と米国の往復をくり返して来たが、昨年7月に東京都東久留米市に居を構え、永住の意思を固めている。

米国でジャズの軽快なダンス音楽だったスイングが、即興を多彩に交えたビバップに変遷を始めた19

40年代、カント・ベイシー(ピアノ、1904~84年)やチャーリー・パーカー(サクソフーン、1920~55年)らジャズの巨人たちと演奏したトンプソンさんは「サー」の愛称を付け、その後はレスター・ヤング(サクソフーン、1909~59年)だったという。

演奏終了後、同協会会長でもある外山さんは「伝説的プレイヤーと演奏で、心も大いにスイングしました。トンプソンさんは英語で「最高に楽しめました」。牧子夫人が「先日、チャーリー・パーカーが夢に出てきたというので、」そのまま(あっちの世界に)「行け!」って言ってやっただけです」とユーモアたっぷりに話すと会場は笑い声に包まれた。もちろん、真意は「そんな夢見ないで、長生きしてね。だっただけに違いない。(宝田茂樹)

2011.3.4
15
7時



演奏後、外山善雄さん(前列左から2人目)とデキシシーエンターのメンバーらに囲まれる、サー・チャールズ・トンプソンさんと牧子夫人(前列右から3、4人目)

ところで、中間派ジャズの名付け親、大橋巨泉さんは海外からメールを下された。

トンプソン是非見たいけれども日本にいないので…。外山さんによろしく。次の機会には行きたいので、また知らせてくださいと伝えてください。

大橋巨泉>

ご来場の皆様も、本当にありがとうございました。今後ともWJFに変わらぬご支援、ご鞭撻をお願いいたします。

<サー・チャールズ・トンプソン語録>

「トヤマ。信じられるかい。私はビバップ最後の生き残りなんだよ！」

サー・チャールズが感慨を込めてよく語る言葉である。

「チャーリー・パーカーやコールマン・ホーキンスが私のバンドにいたなんて、信じられない気分さ。私達が出ていたニューヨークの52丁目は、夢のようなジャズ・ストリートだった。でも、パーカーやガレスピーは、音楽を難しくし過ぎたね」

『ビック・ディッケンソン・ショウケース』のCDに入っているビックやエドモンド・ホールやジョー・ジョーンズ、そしてベイシー楽団のバック・クレイトンやハリー・エディソン…。彼等は本当に天才なんだ、ジーニアスさ！彼等の音楽は小難しくも何ともない。ベイシーにしたって、エリントンにしたって、メロディーがあって、スイングしていて、一般大衆が理解して楽しめるジャズなんだ。最近の音楽は、ミュージシャンが、自分がどれだけ上手かを証明してみせようとするだけの様な気がしてね…」

「ゴルフのキャディをやってゴルフを覚えたのも12歳の時さ。音楽で稼ぐずっと前にゴルフで稼いでいたんだ。賭けゴルフをするのさ。私のような子供がゴルフが上手いなんて思わないから、けっこう大人をカモっていたのさ…。ハハハ…」

「音楽でお金を稼げるなんて思ってもいなかったよ。ある日、パーティがあって、ちょっと好きだったピアノを弾いたら、ピアノで仕事に来るようになってビックリしたよ。12歳の頃、私が最初にやった音楽は何だったと思う？ これさ…」

と言って、次に彼は軽やかな身ぶりでタップのステップを踏みはじめた。これが上手い！あのニコラス・ブラサースが子供の頃にやっていた同じステップ、体の動き、身のこなし…。

聞けば、少年時代、通りでタップを踏み、小銭を稼いでいたと言う。スラッとした長身の彼の姿に、今でも路上でタップを踏んでいるニューオリンズの黒人の子供たちの姿がダブった。

サッチモ、ベイシー、デューク、キャブ・キャロウェイ…。アメリカのジャズの巨人たちがもっている大衆性の源が、こんな所にあるよう思えた。

「今日は何とも不思議な気持ちだよ。こんなに私の音楽を、心から理解してくれるミュージシャン達に日本で出会ってセッションを残せるなんてね。そしてまた、素晴らしい伴侶に出会ったのも、この日本なんだ…」

ポスター、プログラム、楽譜、SP、資料…驚きの目を見張る外山夫妻

サッチモとサッカーの“お宝”で埋まった会長さんの執務室

——ポニーキャニオン会長、佐藤修さん(WJF 賛助会員)を訪ねる

サー・チャールズ・トンプソンとセインツの WJF“アカデミック・コラボ例会”の感動がまださめやらぬ1週間後の2月22日、外山喜雄・恵子夫妻ともども東京・港区虎ノ門のポニーキャニオン本社に会長、佐藤修さん(WJF 賛助会員)を訪ねた。あの例会の当日、佐藤さんは超お忙しいスケジュールをやりくりして会場に駆けつけて下さった。佐藤さんはサッチモとジョージ・ルイスの大ファン。そこで、この日の訪問は“例会補遺”といった感じになり、サッチモ談義は大いに盛り上がる。佐藤さんは、SP やポスターなどサッチモばかりでなく、ジャズ、映画、音楽関連グッズの隠れた(?)コレクターでもある。外山夫妻との話題は尽きず、あつという間の2時間で…。(小泉良夫)

会長室は音楽とサッカーの“殿堂” 次々飛び出す貴重なジャズ・グッズ

佐藤さんが我々を迎え入れてくれたのは、何と9階の会長室そのもの(応接室ではありませんよ!)。執務デスクの前に大きなテーブルがあって、そこに我々は(畏れ多くも!?) そっと座ったのですが、周りを見渡してびっくり! サッチモなどジャズ関係のポスター、20世紀初頭の貴重な蓄音機や蝋管、オルゴールや自動楽器、オーディオ機器、CD、立派なガラス戸棚を占領しているサッカーボール、著名なミュージシャンやサッカー選手との記念写真スタンド…といった“お宝”に雑然と? 囲まれていた。まさに音楽とサッカーの“殿堂”(写真右)。「ヒューッ!」…私ならずとも外山夫妻も、肝をつぶしたに違いありません。



そんなことは序の口。その大きなテーブルの上に「外山さん、これこれ、これはあの…」と、佐藤さんが、次から次と、秘蔵の“お宝”を取り出してきては、ほいほいと並べる。外山夫妻、「オー! ワー! フーン…これこれ!」。私の方は何がどれやさっぱり分からないのですが、サッチモのオリジナル・ポスター! やら、プログラム、楽譜(外山夫妻は、その中の一つに「あ、これだけは持ってます!」、書籍(ジャズ関連の洋書もぎっしり!),そしてSPアルバム…。「オー、これ、これ…」と盛り上がり、取材どころではありません。

LIFE誌サッチモ特集号には なんと! 本人の肉筆サインまで

ちよっぴりメモしてきたのは、たとえば1966年4月発行「LIFE」誌。表・裏表紙との見開きでトランペットを吹くサッチモの真上から大写真で知られ、インタビューの掲載された“サッチモ特集号”(写真下)…何より凄いのは、サッチモの肉筆サイン入り! JAZZ SOCIETY レーベルの HOT JAZZ CLASSIC アルバム「KING LOUIS」。分厚い洋書の「COMPLETE DISCOGRAPHY OF SATCHMO」など、など…。これらを広げながら説明する佐藤さん。「これだけのサッチモ・コレクションは、きっとサッチモ本人も持っていないかも…」と外山さん。…と言うことは、あのサッチモハウスのコレクションを超えるものも! ?

あまり沢山あるので、その他の“お宝”類は、次頁の写真を見て想像していただくとして…「で、佐藤さん、これら



を整理、分類なさって、リストなどをお作りになっているんですか?」(あつたら見せていただき、メモしてこうと…)、「いや、全然…ははは…」で、私の頭は何が何やら混乱す

るばかり。

いったい何が、佐藤さんをこれほどまでジャズ、サッチモ、ジョージ・ルイスの虜(とりこ)にし、音楽を生涯の職業にまでしてしまったのか。

まずは佐藤さんのお父上。クラシックの SP アルバムを家の根太(ねだ)が外れるほど集めていらしたという。「クラシックは一曲の演奏時間が長いので SP1枚にはとても収まりきれない。それで何枚かに分けて収めていたんですね。レコードの“アルバム”という言葉は、ここからきたんですよ」。あ、なるほど、そうだったんだ! 「父が、クラシックばかりだったものですから、子供って、そんなことに逆らうでしょう。それで私はジャズ…」。

ペレやジーコのサイン入りボールも サッカーも半端にはやっていません

でも、それほどジャズばかりに首を突っ込んでいたわけではない。中学時代からサッカーにも、のめり込んでいる。慶応義塾の大学時代はサッカー部。ポジションはゴール

キーパー。指先がみんなあらぬ方向に曲がってしまったほど没頭したようだ。そして、いまや日本クラブユースサッカー連盟会長。ガラス戸棚のボールは、みんな何らかの貴重な記念品。ペレや、ジーコのサインボールも。「to Satoh」とのボールのサインに「あらSatchって…佐藤さんのサッチモ好きは、サッカー界でも知れ渡っているんですねえ」と恵子さん。「いや、それはサトーですよ」と佐藤さん。それには笑ったが、まさに佐藤さんは「Satchmo」と異名をとってもおかしくない。



お宅にはこんなサッチモ人形などいろいろと！

“あの頃”ジャズが一番新しかった ラジオ深夜番組、S盤、L盤アワー

ラジオ東京(現TBSラジオ)で志摩夕起夫さんの深夜番組「イングリッシュ・アワー」とか、にも耳を傾けていた。「あの当時、ジャズが一番新しい音楽として、ポピュラーの先頭をいっていたんです。ファンキー・ルックとか、ファンキー・ハットなんかも、出てきましたよね。『スイングジャーナル』誌も読んでいました。“ジャズはレベルが高い”とかいって、ウエスタン・カーニバルなんかを見下していた方もいらしたでしょ、そんな時代です」。始めはグレン・ミラーなどを聴いていた。サッチモ、ジョージ・ルイスには高校に入ってから傾いていく。「最初はジョージ・ルイスでしたよ。というも、あの頃、“サッチモはシカゴからニューヨークへ行って、白人とも交わっていた”という感覚があって、ニューオリンズに残っていたジョージ・ルイスの方に“純粋さ”を感じていたからです」。モダンジャズが隆盛となった時代、あまりに誰も彼もが『ファンキーだ！』と騒いでいたため、佐藤さんは逆に『何がファンキーだ！』とニューオリンズ・ジャズの世界にのめり込んだという。

“純粋な”ジョージ・ルイスに憧れ 「ビクター」に就職してしまった！？

佐藤さんは、そんな“純粋な”ジョージ・ルイスのレコードを探しまくった。「リバーサイド・レコードにいっぱい

あったんです。高校生の頃、日本のレコード会社でリバーサイドと契約している会社はありませんでした。そして、ビクターがリバーサイドとライセンス契約したのを知ってビクターの就職試験を受けたのです」。そう、まさか佐藤さんが、ジョージ・ルイスが好きで就職先を決めたとは、誰にも気づかれたい！？ けれど古いジャズは売れなかったとか。そうそう、佐藤さん

は「St. James Infirmary」にぞっこんで、いろいろなミュージシャンがアルバムを残しているが、それらはほとんどすべて収集されているという。病高じて「森進一さんにこれを歌わせたいですよ」と外山さん。「いやいや、もうこれだけです、職権でやらせてもらったのは…」苦笑いの佐藤さん。いつだったか、この会報にも、そんな逸話が紹介されていたことがある。

佐藤さん、もう一つの“職人技”は… 年賀状に彫り続けたサッチモの版画

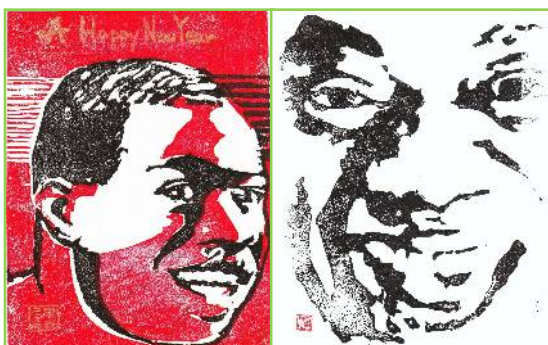
佐藤さんのもう一つのお楽しみは、年賀状にサッチモの顔の版画を(自ら!)彫ってすり込むこと。外山夫妻は、毎年お正月に佐藤さんからのサッチモの年賀状が届くのを楽しみにしているという。会長室にそのファイルがきちんと保存されている。ぱらぱらめくって、感心する外山さん。「いつごろから始めたんですか?」「1985年からです」「ということは…今年で27年目!」

「レコードジャケットをコピーして作るんです(そういえば、みんなどこか見覚えがあるデザイン)。始めの頃は大変でしたよ。はがきの大きさになるまで、いろいろと縮小コピーをとっていく、それから彫り出す…」

「これ、みんなコピーして、今年の夏のツアーでサッチモハウスに持っていきましょうよ」と外山さん。盛んに照れる



デスクにサッチモの“お宝”をずらりと並べてご満悦の佐藤さん(中央)と外山夫妻＝ポニーキャニオン会長室で



佐藤さん。
ジャズとサッチモをめぐる楽しい話題は尽きないが、先の第49回例会で瀬川昌久

さんが紹介して下さった大橋巨泉さんの随想のように、どうしてジャズは、難しくなりすぎてしまったのだろう。めまぐるしく変わっていったんだろう。

ジャズはなぜ変わってしまった？ そして、なぜこんなにも難解に…

そんな疑問に、佐藤さんはズバリ。

「ジャズは基本的にポピュラー音楽なんです。ポピュラー音楽は変わっていかないとしょうがない。新しいことがいいんだと。その中に哲学的なものを求める時代背景があったりする。時代の気分で、もの凄く変わっていく。ただ楽しんでいだけでは、芸術性がないなどになってしまうんです」

それがどんどん行き過ぎてしまって、難しくなっちゃったとおっしゃる。

「日本では、『スイングジャーナル』誌が、そのようにジャズやジャズファンを育てていって、動きがとれなくなった。

そういう宿命を持っているんですよ、ジャズは。編集者が評論家になってしまい、批判的なことしか言わない。難しくなりすぎて楽しみがなくなっちゃった。楽しいのをバカにする傾向もある。こうした傾向は日本独特…世界的に見ても珍しいのでは」と佐藤さん。

外山夫妻も同意見。

「そうなんです、私たちは、サッチモにあこがれ、ニューオリンズへ行ったんですが、ある期間、“純粹”なジャズを求めて、バンク・ジョンソンの真似ばかりしていた時代もありました。でも、地元ジャズに触れ初めて分かりました。“そうか、こんなにみんなと一緒に楽しんでいるのがジャズなんだ”って。ニューオリンズに残っていたミュージシャンのパワーとか荒っぽさ、そしてスイング感…そんなのがすべてのジャズの原点にあるんだと、気づいたんですよ。彼らは常に“エンターテナー”なんだって…」。

居酒屋、ラーメン店、焼き鳥屋さん… BGMでも流れ、親しまれているのに

…なのに、巷では、ジャズは分からないからこそ、いいんだみたいな、楽しくないんだけど、背伸びして分かっ

たような顔をしている。そのほうがジャズの芸術性を理解しているように思われる…なあんていう展開になってきた。

「ジャズはポピュラー音楽の中でも別格で、ジャズも、クラシックも、何となくハイ・ステイタスな音楽になってしまった」と佐藤さん。「ジャズが好き」なあんていうと、ちょっとかっこいいものがあるという。

「最近では、居酒屋でも、ラーメン屋さん、焼き鳥屋さんでも、BGMにジャズを流しているところが増えてきましたよねえ」と恵子さん。中華料理店、韓国料理店…ところ構わずジャズ…。いったいどうして？「いや、かっこいいから…なんです」と佐藤さん。

いまや“ブランド化”したモダンジャズ “楽しいジャズ”を受け入れる若者も

外山さんがあとで分析してくれた。<モダンジャズが雰囲気盛り上げるBGMツールとして“ブランド化”した、ともいえるこの現象、ジーンパンにTシャツ姿、腰にヴィトンと



WJF第49回例会でサー・チャールズ・トンソン、外山夫妻と…佐藤会長(右端)

いう若者達の傾向に似ているとも言える。一方、若者達には、サッチモやキャブ・キャロウェイ、全盛期のスイングジャズなどを、なんの違和感もなく受け入れる嬉しい傾向も現れている。それは、私たちが初めてジャズを聞いた半世紀前のことを思いださせる。ホテルから商店街、街中に溢れるジャズは、単なるBGMツールとしてのジャズかも知れない。しかし、多くの人に“か

っこいい”として受け入れられ、ジャズファンが増えるうちに、ジャズの主流は再び楽しいものに戻っていくかも知れない」と。

外山夫妻は、その時のためにこう主張したいという。「ジャズは、『スイングしなけりゃ意味がない』…ジャズ本来の楽しさを取り戻そう！古き良き時代のジャズを愛するベテラン・ジャズファンと楽しくかっこいいものが好きな若者達…みんなが一緒になって、ジャズをリフォームするきっかけを作れば良いですね〜！」と。そう、外山夫妻が常々主張し、展開してきた“楽しいジャズ”。これからもよろしく！

佐藤さん、今回は、本当に有り難うございました！

NHKジャズ講座の 誤った構成に反論する！！

特別寄稿：

WJF 会員、瀬川昌久さん
(評論家＝映画、音楽、
ジャズ、ミュージカルなど)



昨年NHKがBS放送で放映している**坂本龍一プロデュース**による音楽番組があり、ジャズからロック、クラシックまで各ジャンルの音楽を専門的かつ平易に解説して、好評を博しているようだ。そのジャズ篇が、本年正月に再放送され、4部全篇を続けて流した。坂本龍一が総合プロデューサーで、山下洋輔と大谷龍生がゲストのような形で参加し、**ジャズをブルースから、ニューオリンズ、スウィング、モダン・ジャズ(ビーバップ)と大きく歴史的に類別して、講座を進めた**。私はたまたまスウィングからモダン・ジャズに移行するところから、テレビを見たのであるが、小学生バンドや音大バンドをスタジオに入れて、彼等に実際の演奏をさせながら、解説を進める形をとっていた。

私の見た内容を説明すると、ジャズの起源として「**コール&レスポンス**」という**応答形式を紹介**して、音大バンドに演奏させたが、相当にモダンな譜面であったため、スウィング時代のフレッチャー・ヘンダーソン編曲手法のような**サクソ群とプラス群が交互に応答する形式を明確に示したものでなかった**。そして、スウィング・ジャズが極めてエンターテインメント性の強いものであったことを説明した後、ビーバップを楽器の即興演奏(アドリブ)の方式を初めて理論的に表示したものであるとして、アドリブ理論はビーバップから発生したと断じた。

しかし、ビーバップのプレイは極めて難解であるところから、それをより平易にプレイできるように考案したのが、マイルスの始めたモード奏法である、と説明を加えた。そして、**山下洋輔は「ビーバップにも、モードにも飽き足らなくなって、もっと自由にプレイしたいと考えて到達したのが、フリー・ジャズ奏法である」と解説**した。そして、子供達のバンドに譜面に囚われないフリーなアンサンブルを吹かせて、「これが究極のジャズである」と満足そうに語って、スタジオは拍手に包まれたのである。

私はこれを見て、子供や初心者にはジャズのおもしろさを理解させるのに、**この論法が果たして妥当であろうか、と強い疑問**を抱かざるを得なかった。アドリブ手法は、果たしてビーバップ理論で、初めて定義づけられたものであろうか。**ニュー**

オリンズ・ジャズやシカゴ・ジャズ、スウィング・ジャズは、まだ理論的に定義づけられないほど、未熟な発展途上のものであったのだろうか。ジョージ・ルイスの「バーガンディ・ストリート・ブルース」のあのセンチメンタルな哀愁に満ちたフレーズと、彼のクラリネットの寂々たる音色はどう説明すべきか。ルイ・アームストロングの「ウエスト・エンド・ブルース」のあの高音から始まる天にとどろくようなイントロの急速調のフレーズは、何故今日まであらゆるトランペッターに、バイブル的なインパクトを与えているのだろうか。ウイントン・マルサリスが、「いまルイは史上最高のトランペッターである」と評しているのは、何故だろうか。キング・オリヴァーがルイに教えた「ブルース」を、フレッチャー・ヘンダーソンがビッグバンド用に再編曲した「シュガーフット・ストンプ」におけるルイのトランペット・ソロが、その後20年間も多くのトランペット奏者によって再現されているのは、どう説明すべきだろうか。**坂本の講座では、ルイのルの字も出ないのである。**スウィング・ジャズはエンターテインメント性の強いジャズというが、何故「シング・シング・シング」や「A 列車で行こう」が今日も多くモダン・ビッグ・バンドのレパートリーに入っているのだろうか。

そして、ビーバップが、チャーリー・パーカーやディジー・ガレスピーによって、それまでのアドリブ奏法をより深化させたのは事実としても、それに嫌気がさして、より平易なものを欲した結果、モード奏法が生まれた、というのはあまりに暴言ではないか。そして、それにも満足できず、フリー・ジャズで初めて満足した、というのは、余りに子供じみた飛躍ではなからうか。

私が何より恐れるのは、これを見た視聴者がフリー・ジャズ以前の音楽はすべて未開発の低い水準のジャズだ、と解釈しかねないことである。殊にルイを信奉し、ニューオリンズやデキシーランド・ジャズの演奏に意欲を燃やしている多数のジャズメンたちの立派な演奏が、軽視されかねないことを恐れる。**ディキシーやルイの音楽が、単なるエンターテインメントに止まらず、音楽として鑑賞し、研究し、熟成するに値するということを、もっと広く世界に訴え知らせていかなければならない。**殊にルイのプレイは欧米ではあれほど尊敬されているのだから。音楽的にも、ビーバップやフリーのトランペッターに勝るとも劣らないことを周知させる必要がある。私は外山喜雄さんにルイのソロのプレイの音楽的分析を譜面や理論書にして、トランペットを教える音楽学校や教室の教科書に作成して、ガレスピーやマイルスと並ぶ教材にして欲しいのである。

「油井正一アーカイヴ開室」にあたって

油井先生の思い出

特別寄稿：賛助会員 中村宏さん
(ジャズ評論家、防衛医大名誉教授)



母校・慶大に寄贈された遺品1万点 8年がかりで整備し1月から一般公開

「油井正一アーカイヴ」は、日本のジャズ評論の草分けである油井先生が、1998年に亡くなるまで、書き留められた、メモ、ノート、ファイル、原稿、雑誌、図書、印刷物、写真、放送番組台本、レコード、CD、テープ、ビデオ、その他の雑資料等約1万点に及ぶ遺品を、ご遺族が母校の慶応義塾大学へ寄贈され、その資料をアーツ・アーカイヴが内容の精査、整理を進め、8年がかりで、基礎的な資料整備を完了し、一般のジャズ愛好家、研究家に2011年1月から公開される運びとなったものである。その一部、1978年の一年分は、2008年1月に、2週間一般公開されたが、油井先生が調査、記録、執筆した夥しい資料がよく整理されているのに感心した。書簡のやりとりをみると、まさに慶応義塾大学アート・センターが目指す、アーティストの眼差しや息づかいを告げる一次資料との出会いの場であることを知ることが出来た。「油井正一アーカイヴ」は、週1日開室、事前予約・利用者登録制で、問い合わせ先は、慶応義塾大学アート・センター(電話：03-5427-1621)。

医学部に行けばジャズが聴ける！？ 初対面の油井先生から思わぬ情報

私が油井先生と初めてお会いしたのは、新橋駅前にあった蔵前工業会館で開かれたホット・クラブ・オブ・ジャパンで、第三木曜日の月例会の時だった。昭和20年後半で、最初の頃は神戸に住んでおられたが、毎月ホット・クラブのために、上京して来られた。ホット・クラブ会長、村岡貞氏のもと書記長だった。

私が慶応の医学部に入学したのは、実は医者になるのが目的ではなかった。やはりホット・クラブで知り合いになったジャズ評論家、牧芳雄(本名牧田清志先生)が慶応の医学部で教えているということを知り、帰途送って下さったタクシーの中で知ったので、慶応に行けばジャズが聴けると早合点したためだった。入学式が終わって、先輩が立て看板を持って新入生勧誘をやっている中で、「KLMS(慶応ライト・ミュージック・ソサエティ)鑑賞部」というのを見つけ、そこに入部した。立て看板を持っていたのは、工学部機械学科のH君だった。H君は、ルイ・アームストロングの大的信奉者で、懸命にトランペッ

トを練習したが、一向に進歩せず、KLMSのレギュラー・メンバーからはずれて、鑑賞部を立ち上げた。その時も一人入部し、部員は全部で三人だった。

ジャズ評論家、牧芳雄さんが教鞭 日吉キャンパスで軽音楽鑑賞会

その頃、ホット・クラブで、ジャズの歴史を系統的に紹介する、わが国初のジャズ講座を開催しようという企画が持ち上がっていた。しかしホット・クラブは営利団体ではなかったし、資金的にも余裕がなかったので、KLMS 鑑賞部が主催してやることになった。企画・立案はすべて油井先生が担当された。いざ準備に取り掛かった時、チーフのH君が部費を持ち逃げして、雲隠れしてしまった。資金面でも、部員数でも、とて

もジャズ講座を開ける状態ではなかった。そこで新たに牧田先生に会長をお願いして、慶応軽音楽鑑賞会という会を立ち上げた。通常その頭文字をとってKKKと呼んでいる。クー・クラックス・クランを連想してしまうので、慶応ジャズ鑑賞会にしようという提案したが、牧田先生はジャズだけでは会員を



アーカイヴ開室にあたってゲストとして講演された中川ヨウさん(音楽ジャーナリスト)＝後ろには油井さんがこよなく愛したピクサー・バイダーベックが映し出されていた



例会には欠かさずおいでになりWJFを支えて下さっている中村さんご夫妻(後列、前列はサー・チャールストンプソンご夫妻)

集め難いよと言われ、ユーモアに富んでいた方だったので、KKKの方が逆説的で面白いよと言われた。当時はKKKといっても、現在ほど気にされない時代だったことも確かだ。この名前で会員募集をして、発会レコード・コンサートを日吉キャンパスの大教室で開いたところ、入りきれない位学生が集まり、250名の会員を集めることに成功し、牧田先生の見通しは見事的中した。この会の顧問は、ジャズ油井正一、カントリー藤井肇、シャンソン芦原英了、中南米音楽高山方明、映画音楽関光夫各氏で、当時NHKの午後放送されていたリズムアワーの担当者ばかりだった。これだけ豪華な解説者を集めたレコード・コンサートは後にも先にも先ずないと思われる。

日本最初の「ジャズ講座」開講 講師に超豪華メンバー参集！

KKKが発足してようやく態勢は整ったものの、色々と難問が待ち構えていた。先ずKKKという団体が正式に認められ

ていなかったで、実質的には KKK が運営したが、主催は KLMS 鑑賞部となった。また講座を一般に公開することで学生部の教室使用許可が下りなかった。その時学生部事務長の六郷次郎氏が油井先生の同級生であることが判り、油井先生の電話一本で直ぐ許可が下りた。当初の資金繰りにも苦勞した。油井先生から当時で5万円という大金をお借りし、後に牧田先生が肩代わりして下さり、油井先生の口利きで講座の記録を『ダンスと音楽』という雑誌に、1回500円で載せて、これで借金の一部をお返しした。

悪戦苦闘した後、昭和30年(1955年)10月から2週に1回三田キャンパスでわが国最初のジャズ講座が開講された。この事実はきちんと記録に残しておこうと油井先生が言われ、1987年9月号のスイングジャーナルの「油井正一語りおろし JAZZ 昭和史」という連載物に私との対談という形式で載っている。

全8回の講座内容は、「ジャズ発生前史」工藤昌男、「ニューオリンズ・ジャズ」池上梯三、「シカゴ・ジャズ」油井正一、「カンサス・シティ」藤井肇、「スウィング」野口久光、「ディキシー・リヴァイバル」河野隆次、「バップ&クール」牧芳雄、「ジャズのスタイルとプレイヤー」野川香文という当時の超豪華メンバーで、油井先生が交渉して集められた。油井先生からこれらの先生方に紹介して頂き、講座の資料作製のお手伝いのため、諸先生のお宅にお邪魔し、その後も親しくお付き合いすることが出来るようになった。この講座には、当時、若手評論家といわれた飯塚経世、イツノルヲ、大橋巨泉、久保田二郎、福田一郎(五十音順)各氏も全回聞きに来られた。

月例レコード鑑賞会にも油井先生 米軍基地やご自宅でもお世話に…

油井先生には、KKK の月例レコード鑑賞会の解説にもよく来て頂いた。ジャズのレコードが入手困難だった当時、相当のコレクションを既にお持ちだったが、それに加えて、レコード会社や放送局から借りた LP も持って来られた。先生のジャズのルーツであるシカゴ・ジャズの解説に熱弁をふるわれたが、モダン・ジャズとビッグ・バンドの好きな人が多かった KKK の会員は、その中に、マイルス・デイヴィス、スタン・ケントン、ウディー・ハーマン等のレコードがあるのを見て、何時掛かるのかとわくわくしながら待っていたが、時間切れで聞かれず、残念がったこともあった。油井先生は、マイルス・デイヴィスの

絶えず前へ前へと前進しようという意欲は高く評価しておられたが、晩年のジャズの範囲を少し越えて、更に進もうとしていた時期のマイルスには批判的だった。

朝霞の米軍キャンプにボウジー・ホワイトという世界的に有名なビックス・バイダーベックの研究者が、進駐軍の将校として来日していた。その宿舎にも連れていって頂き、夜が更けるのも忘れて、珍しいレコードを聴いたのも、懐かしい思い出だ。

ジャズ講座やレコード鑑賞会の打ち合わせのため、日本橋本町にあった油井商事株式会社の社長室に伺ったが、東京

に引っ越して来られてからは、日吉キャンパスに行く途中の、東横線の都立大学前から徒歩数分の所にあったお宅にしばしばお邪魔し、ご馳走にもなった。奥様が2階の油井先生の居間にお寿司やうな井を運んで下さった。ここで私は油井先生のために大分貢献した。お酒の大好きな先生だったが、一晩2合に奥様から制限されていた。私はビールを一口

飲んででも真っ赤になる質なので、一人で飲んでいるように見せかけて、実際は私の分は先生に差し上げて奥様を騙していた。

お酒が大好き、干物も大好物で… 痛風の激痛、二度と味わいたくない

油井先生の奥様には色々大変お世話になったが、私が防衛医大に赴任して間もなく、奥様が MRSA という抗生物質の全く効かない細菌感染による腎盂腎炎に罹られた。油井先生からお電話があり、直ぐに入院して頂いた。かなりの重症で、万一のこともありうるという状態だったが、大変心配そうに見つめおられた、愛妻家の油井先生にはとてもお話し出来なかった。意を決して危険性のことは、何も申し上げなかったが、幸い当時はまだ発売されていなかった、バンコマイシンという唯一この細菌に効く抗生剤を入手することが出来て、無事治癒、退院され、多少なりとも恩返しが出来たかと思っ

た。KKK の OB 懇親会を熱海の後楽園ホテルで開催した時にも、油井先生はお出で下さったが、その翌日、足の指が物凄く痛くて歩けないというお電話を頂いた。干物がお好きで、熱海でも沢山食べておられ、自宅にも沢山買って帰られた。お酒のおつまみには尿酸が沢山含まれている物が多いので、直ぐに痛風発作だと判断出来た。奥様にコルヒチンという鎮痛剤を取りに来て頂き、取り敢えず、痛みを和らげ、あとはザ



KKKのOB会で十国峠に行ったさいの帰路で中村さんと油井さん=1985年

イロリックという尿酸を下げる薬を内服して頂いたが、亡くなる迄この薬だけは定期的に欠かさずに取りに来られた。あの激痛は二度と味わいたくないとおっしゃっていたが、本音は好物の干物やおつまみを召し上がりたかったためではないかと思っていた。

米国留学中の私に適切なアドバイス ニューポートのあの故障までご存じ

1962年に、私がニューヨークのマウント・サイナイ病院にレジデントとして留学していた時に、ヒッコリー・ハウスで知り合った、デイヴ・ベイリーがジェリー・マリガン・クワルテットの一員として来日した際、油井先生が、是非会いたいとおっしゃって、渋谷にあった歌手の丸山清子が経営していた天ぷらやで懇談したことがある。彼は非常にインテリのドラマーで、ジャズ界の事情に詳しかった。アメリカのジャズ・ミュージシャンが思っておられた以上に生活に苦労していることに驚いておられた。音楽だけで生活している人はほんの一握りで、大部分のミュージシャンは他に仕事をしていて、誰がどんな職業に就いているのかに興味を抱いておられた。因に、デイヴ・ベイリーは航空機の操縦法の教官だった。



マウントフジ・ジャズ祭で中村さんと油井さん(前列右から)を囲んで=1995年

1963年のニューポート・ジャズ・フェスティバルに初めて行った時、ソニー・ロリンズ・クワルテットにコールマン・ホーキンスが加わったセッションで、ホーキンスの音がロリンズと比べて、まるで小さく、ホーキンスがいかにも老いこんだという印象を受けた。帰国後、油井先生から、ホーキンス側のマイクがその時壊れていたということをお聞きした。会場に居ても気が付かなかったことを、ご存知だったのには流石と感心した。

未知のNYも地理を熟知して… 名調子で日本から道順をガイド

1968年に二度目の留学で、コーネル大学に行く前、そこから歩いて行けるところに、エディー・コンドンが経営している「エディー・コンドンズ」というライブ・ハウスがあるから、是非行くようにと言われた。日本流に言うと、「何丁目の煙草屋の角を右に曲がって、二つ目の横町を左に曲がるとすぐにある」といった例の名調子で教えて下さったが、実際その通りだった。それまで、一度もニューヨークにいらっしやったことのない先生だが、何度も行ったことのあるように、実によく町の地図を

知っておられた。エディー・コンドンズは、余り広くない古い建物だった。コンドンの友人が真冬の寒い時に彼を尋ねたが、見当たらない。大きな声で呼ぶと冷蔵庫の中から出てきて、外が余り寒いので、冷蔵庫の中にいた、という油井先生のお得意のお話しに出てくる冷蔵庫がいかにも調理場にありそうな雰囲気のところだった。滅多に聞けないエディー・コンドンの生のギターを、目の前で聞くことが出来たが、やはり音は蚊の鳴くように小さかった。たまたまジョン・ハモンドが来ていたが、噂通り、彼が吃りであることも確かめられた。

ロンドンから病気診断依頼の電話 帰国しエリントンの誕生祝いに！

1972年4月初め、珍しく夜遅く油井先生からお電話があり、今ロンドンにいるが、右上腹部に激痛があり、病院に行ったら胆石と診断され、手術を受けるように言われたけれども、どうしたものかというお尋ねでした。外国で手術をするのは心細いとおっしゃるので、取り敢えず注射で痛みを止め、若し痛みが治まったら、内服の鎮痛剤を貰って、直ぐ帰国されるようお勧めした。当時私は慶応病院にいたので、4月13日に外科に入院して頂いた。精査の結果やはり、手術の適応と診断されたが、出来れば手術は受けたくないのご意向で、保存的に様子を見ることになった。丁度その時デューク・エリントンが来日中で、私がニューヨーク滞在中、

デューク・エリントン・ソサイアティに所属していた関係もあって、彼の誕生日祝いをホット・クラブ・オブ・ジャパン主催で行う予定になっていた。彼の誕生日は4月29日だが、少し遅れて5月13日に、いソノてルヲ氏が総支配人だった自由が丘の「楼蘭」で祝賀会を開いた。油井先生は入院中だったので、案内状等の雑用をお手伝いしたが、当日は痛みも治まり無事退院され、パーティーにも出席された。当時ヘレン・メリルが東京に住んでいて、彼女も出席した。

シカゴ・ジャズが最も好きだったが サッチモを敬い WJF の協会設立にも

油井先生はビックス・パイダーベックを始め、シカゴ・ジャズが最も好きでしたが、若しルイ・アームストロングがいなければ、ビックスは現れなかつただろうとも言っておられ、1994年7月6日、ルイ・アームストロング・ファウンデーション・ジャパンが、渋谷のタワー・レコード・ビルの地下にあったイタリア・レストラン「ボス」で設立パーティーがあった時にも来ておられました。

1996年に、勲四等瑞宝章を受賞された時、お祝いの会を開催しようとしたが、方々から申し出があるので、一度に纏めてやりたいのご意向を示された。結局レコード会社主催で祝賀会が開かれたが、その席上、ジョージ川口が、並み居るジャズ評論家の前で、「油井先生は唯一の信用出来る評論家で、他の人は全くあてにならない」と述べ、一瞬ドキッとしたが、ジョージ川口ということで、その場にいた人は笑って聞き過ぎた。KKKは油井先生には特別にお世話になったので、他のグループには内緒でという条件付きで、大野雄二トリオを招いて、単独に赤坂のクラブで祝賀会を開かせて頂いた。

1997年11月12日の午前9時頃、油井先生の奥様から突然電話がかかってきた。何時も起きてくる時間に、2階から下りて来ないので、見に行ったらベッドから落ちて眠っていて、声をかけても返事はなく、微かに息はしているようだが、どうしたらよいかというご相談だった。兎に角、大至急、雇い付けのお医者さんに往診を依頼するよにと申し上げ、その先生からの連絡を待った。脳卒中の疑いで、入院を要するというご判断だったが、近くの病院は何れも満床で入院させられないというご返事だった。東京医療センターが比較のお宅から近く、院長の東條先生が私と同級生だったので、彼に頼むことにした。生憎、学会出張中で不在だったが、何とか連絡を取



1996年に勲4等瑞宝章を受賞された油井さん(左上の写真)と祝賀会では、油井さん(前列中央)を囲んで中村宏さん(後列右)と牧芳雄さんのご令嬢、渡辺玲子さん(前列右=サッチモの旅でも「常連さん」)

って貰った。一般病棟は一杯だったが、取り敢えず通常は救急患者は受け入れない特別室に入院して頂くことが出来た。診断結果はくも膜下出血だった。この病気の特徴的な点は、危険因子として過度の飲酒が挙げられていて、初回の出血によって約半数は治療の対象とならないほど重篤化する。夕方お見舞いに行き、声を掛けると薄目を開けられたが、お話しなされることは出来ず、亡くられる迄、一度も意識は回復されなかった。

サン・ディエゴの学会から成田に帰宅 到着のまさにその時が亡くなった時刻

1998年6月8日、サン・ディエゴで開かれた学会から帰宅すると、東條先生から留守電が入っていた。「午後2時21分に油井先生が亡くなられた」という知らせだった。私の乗った飛行機が成田空港に着陸したのが丁度その頃で、何か運命的なものを感じた。お通夜では、ビックスの演奏がずっと流れ

ていたが、すごく新鮮に感じられ、どこか前衛ジャズとつながるものを感じられた。

ご遺族から、KKKのOB会(KKKは現役の会は休部中で、OB会のみ存在している)の会員に、お形見としてLPを差し上げたいというお話を頂き、百数十枚の希少なLPを、「油井正一メモリアル 慶応軽音楽鑑賞会」というシールを添付して、会員に配布した。

エディー・コンドンは、グラヴィッツ腫瘍という珍しい腎臓の腫瘍で、私がレジデントとして働いていたマウント・サイナイ病院で、手術を受けた。グラヴィッツ腫瘍という名称は、病理学者として有名だった彼の名前を冠して命名されたが、後に病因に誤りがあることが判り、今日ではその名称は用いられていないが、油井先生のご長男が、昨年の末、この腫瘍のため防衛医大病院で手術を受けられた。油井先生がお好きだったエディー・コンドンと同じ、比較的稀な病気にご長男が罹ら

れたことに、何か因縁めいたものを感じざるを得ない。油井先生は因縁話がお好きで、ジョージ・ルイスにまつわるお話など、あたかも先生がその場に居合わせていらっしゃったかのごとく話された話術が懐かしい。

エディー・コンドンが手術を受けた頃は、横腹に30cm位の長い皮膚切開を入れて腎臓を摘出するという大手術だったが、現在ではお腹に小さな穴を開けて、そこから腹腔鏡を挿入し

て腎臓を切除することが出来るようになり、ご長男も手術の翌日には歩行可能となり、術後1週間ほどで、退院なさった。

医学はこの40年余りで、長足の進歩を遂げたが、ジャズはこの間にどのくらい進歩しただろうか。確かに楽器の奏法は、技術的に進歩したかもしれないし、ジャズの形式にも変化がみられるかもしれない。しかし本質的にジャズが進歩したといえるかどうか、「油井正一アーカイヴ」はそれを解きほぐす手がかりとなるものと思われる。

油井正一氏 1918年(大正7年)8月15日、横浜市生まれ。慶應義塾大学卒。昭和の初期からジャズに興味を持ち、各種雑誌、新聞等で執筆活動が続ける。NHK 始め各民放 AM、FM などでもジャズの解説を放送するなど、我が国のジャズ評論の草分け。著書は「ジャズの歴史物語」など多数。日本音楽家協会顧問など要職を歴任。1996年(平成8年)勲四等瑞宝章受賞。1998年(平成10年)6月8日没、享年79歳。

東日本大震災で外山夫妻宅も機能不全

液状化現象で浦安市の被害は予想以上に甚大
ガス、水道止まり、トイレも浴室も使用できず…

エアコンは埋まったが電気は灯った！！

「東北の皆さんに比べたら、どうと言うことはありません」

大きな被害を受けて休園中の「東京ディズニーランド」の東北側、湾岸道路の浦安IC沿い、外山さん宅(最寄りの駅は京葉線「新浦安」)がある浦安市一帯は、我々の想像以上に液状化の被災地であってしまっただけでなく、特にその地名のように海に近い「美浜」。外山さんからのメールを要約すると、

＜新しく昭和40～50年代くらいに埋め立てられた新町部分が大変。基礎を岩盤まで打った大きな建物、ダイエーやイトヨーカドウの入り口は、周辺の地面だけが50cmから1m落ちて、入り口に大きな段差が出来た！ 富岡と言うところの交差点にあった交番は、ほぼ均等に建物全体が沈下、1.5mほど地面に潜り込んだ感じ。美浜4丁目のわが家の一列が5、6軒並んで後ろへ反りかえり、道路を挟んだ反対側は逆に反り返りました。一部の電柱もずぶずぶと地面に1mほど沈み込みました＞

＜わが家の後ろ側が一番弱い地盤にあたってたようで、数件がその地点に向けて傾いています。家の傾きは、市役所の担当員の話では「50」(1000に対してだと思えます)。ちょっと右側への傾きもあります。液状化で出てきた泥を業者に撤去してもらったら、意外とすごくて、乗用車2台分ほどもありました。泥がかぶっていて、落ち込んだわが家の背面は最初、どうなっているのか、よく分からなかったのですが、泥をとって見て、その落ち込み具合にビックリ。50坪、正方形の敷地の奥が、約50cm落ちた感じですよ＞

＜奥左に浴室があり、つながっている水道、給湯器、下水道は使えなくなりました。給湯器は半分以上土の中、泥が入り込みました。エアコン室外機3台も見事土の中…壊れました。傾きのジャッキアップ等は、やるとしても3、4ヵ月先(早くても)ですので、とりあえず、応急で下水道を復活させることを考えていますが、水道屋さんによると、勾配がとれないかも知れないとのこと。風呂、トイレが使えず、朝は近くのホテルで豪華なトイレを味わっています！ お風呂は、銭湯(はやりのスーパー銭湯等)。近くのブライTONや、舞浜のシェラトン、オリエンタルホテルも@500円で浦安住民限定入浴サービスを始めました。そのうち行きます＞

＜現在、水道は途中で破れていましたので、風呂等奥の部分はあらかじめ管を切って閉めてしまい、手前の台所へだけが生きてチョロチョロ出ています。ガスはダメ、下水道も全くアウトです。液状化の砂がびっしり詰まったのと、管が外れていると思います。台所からの排水は出口に近いので流れています。下水道は、市の担当部分もトラブって、復旧にしばらくかかりそうです。電気は来ていて助かります！ でも、東北の皆さんに比べたら、どうと言うことはありません＞

ご寄付と嬉しいお手紙

ありがとうございます！！

◆大坂美知子様(杉並区)

ピッコロ・トランペット フルーゲルホルン
スライド・トランペット

一流ビッグバンド、高橋達也と東京ユニオンで活躍された名トランペッター、大坂潔さんの遺品をご寄付いただきました。大阪さんは3年前60歳でお亡くなりました。私(外山)も東京ディズニーランド開演時、東京ディズニーランド・バンドのリード・トランペッターとして活躍した大坂さんの雄姿を拝見しておりました。ご冥福をお祈りいたします。奥様より…3年もそのままにしていたので、色が良くないのですが如何なものでしょうか？ 今日楽器を磨きながらまた涙してしまいました。2～3日以内に送らせて頂きます。宜しくお願い致します。

◆土井田 泰様(会員 広島市)

クラリネット、トランペット、ポケット・トランペット

2010年のニューオリンズ・NYサッチモの旅に参加された土井田様から、愛用の楽器をご寄付頂きました。

◆佐藤 修様(ポニーキャニオン会長 会員)

50,000円

◆阪口忠義様(目黒区)

10,000円

◆井上和弘様(大阪市)

10,000円

募集中！

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership) ¥6,000

学生会員(Student Membership) ¥3,000

賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通：5175119「ワンダフルワールド」

お問い合わせは：WJF事務局

TEL：047-351-4464

Fax：047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン：Yahoo,Googleで

ルイ・アームストロング

編集長から

東日本大震災で被災された皆様にお見舞い申し上げます。また被災地区の会員、ジャズ関係の皆さまのご無事を心からお祈りいたします。▼地震の余波は浦安地区をも直撃、液状化による被害状況はこのペー
ジ上欄をお読みください。▼海外のジャズ関係者からの支援の申し出も続々と届いております。困難をジャズのパワーで克服できればと思えます。▼2月15日に開催されたWJF例会は、サー・チャールズ・トンプソンを迎えてのジャズ映画とライブ・コンサート。3月21日で93歳のサー・チャールズが、あの名盤レコード「ジョー・ケース」と同じフレーズでのプレイに、聴衆全員元気をもらいました。▼ポニーキャニオン会長、佐藤修さんのインタビュ、ジャズ評論家、瀬川昌久さん「NHKジャズ講座の誤った構成に反論！」とジャズ評論家/ドクタージャズ、中村宏さん「油井先生の思い出」のジャズパワ
ーあふれる特別寄稿2編もおすすすめです。(山)